

## 第7回 子どもの心を知って保育を創るⅡ(1歳児)

～ いたずら・かみつき・ゆびしゃぶり ～



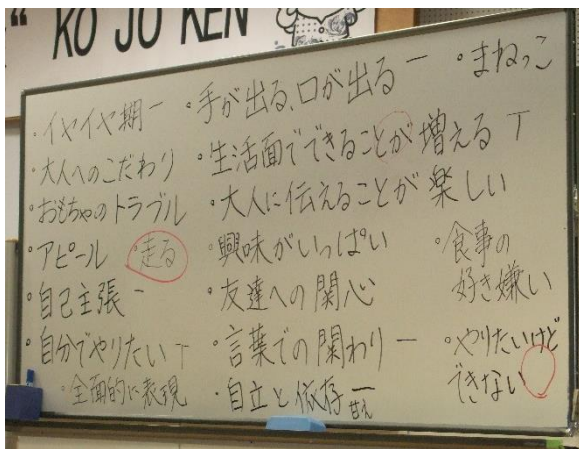
講師 岡村 由紀子 氏

はじめに

保育者の給料は安く、賃金を上げるのは当たり前との風潮がありますが、当然のことながら、私たち保育者の質も問われています。私たちの仕事は人間が生きていく土台をつくる仕事です。子どもに対する誠実さや、保育のプロとして学び続けること、つまり保育の質の向上についても社会から求められています。

1歳児ってどんな姿でしょう。みなさんで意見交換してみましょう。

## — 参加者の考える1歳児の姿 —



1歳児は人間らしい姿を獲得する時期です。人間らしい姿とは①直立二足歩行②言葉を発する③道具を使うことです。

今日は感性・感覚を100%全開真っ只中の1歳児の姿をみなさんと探っていきたいと思います。

1 体の発達

歩行が確立することで、視野が広がり、大人が見ている世界との共有ができます。「バイバイ」

(親から離れる)は特定の人を基地にして、一人で行動することです。これは安全基地からの自立の行為と言えます。「歩き回る」は、今、心が動かされたものに向かいたいという気持ちの表れです。また「走る・跳ぶ」のは、大人に捕まえてほしい、逃げちゃうよといった大人と交わりたいという気持ちや自分の力を試したいという気持ちの表れです。

道具の使用によって、目的意識を持ったり、見通しを持ったりします。例えば、0歳児の前にスプーンを置けば、落とすものや叩くものです。しかし、「スプーンで食べるとおいしいね。」と言言葉を添えることで、食べるという目的ができ、スプーンを道具として使うことができます。

2 心の発達

心の発達(1歳児)の土台として、子どもや大人と共感したり、見通しができたりする生活が大切です。

1歳半は第1質問期と言われています。「あっあ」の声に合わせて、「あっあ、だね」と子どもの興味に共感して、感情交流をする必要があります。この感情交流が心の発達に大きく影響します。子どもは正しい答えを求めているわけではありません。自分の発する声に反応してくれる、受け止めてもらっているという大人とのやりとりを求めています。

① 表像の成立・・・見えないものが見える。そのことによって遊びが変わってきます。「これ、どうぞ」と渡された砂団子は、口に入れ

ません。つまり、本当の団子と似ている共通性を感じ、真似っこの世界を楽しんでいます。これまでの見えている世界から、目の前にない光景や人を思い浮かべるようになります。例えば、以前、散歩に行った楽しい経験がある子ならば、帽子をかぶって玄関に座ります。この子は帽子の向こうに散歩と言う光景を思い浮かべています。この時期は言葉で言えなくても行動で自分の思いを伝えることができます。

- ② 自我の芽生え・・・自己主張を友達の中でして、私とあなたは違う、他とは違う自分の存在を意識します。自分ではない他人がわかり、自分の世界を守りたいので、「いや、いや」という自己主張をします。自己主張はある日突然出てくるものではなく、他者との関係性の中で育つものです。しかし、未熟ですから、友達に対して手が出たり、噛みついたりします。それは、友達に関心があるから起こる行為です。
- ③ 立ち直り・・・1歳半前後からついてくる力です。健診の中で積み木を積む課題があります。積み木を積んで倒れた時、子どもがどんな行動をするかを観察します。大人を振り返り、大人が「うん、うん」とまなざしを送ることで、再度、積み木を積もうとする行動を立ち直りといいます。この立ち直りの力は大人のまなざしによって蓄積され、のちの駄々こねを乗り越える原動力になります。
- ④ 達成感が育っている子・・・大人の共感が多くあると、子どもは安心感の中で積極的に行動して、達成感が育ってきます。思春期から青年期にかけて重大な犯罪をした人の共通点は、1歳児の時にまなざしを拾ってもらった経験が極端に少ない（またはなかった）という研究結果があります。この時期にスマホや

ゲームにお守をしてもらっている子はいったいどんな子に育つのでしょうか。自己コントロールの形成に必要なのは、この時期の大人からのまなざし（共感）です。あっという間に1歳児は過ぎてしまいますが、大変重要な時期と言えます。

- ⑤ 嫌、駄目は独立宣言・・・自分の心の世界が意識化されてきています。本格的に主張するのは2歳児からです。
- ⑥ 欲ばり・・・自己確認が強くなり、自分の好きなものに執着する姿（自己拡大）です。執着を別の言い方にすると、こだわる姿と言えます。こだわる姿がないと、自己主張が育っていきません。「自分の～」と言う姿がとても大事な姿で、こだわりがない方が逆に心配です。
- ⑦ 困った行為・・・いたずら、かみつき、指しゃぶりが代表的な行為です。いたずらは、もののしくみや性質を学びとる行為（探求心旺盛な小さな科学者）です。手先で世の中を知る時代です。いたずらをしている時こそ、子ども理解のチャンスととらえることが必要です。この行為で何を面白がっているかを知り、遊びの中でその行為ができる環境を設定します。かみつきの原因はいろいろです（体調が悪い、ストレス、環境・・・）。子どもだけが原因でない場合が多いです。指しゃぶりは、心の抛り所、ストレス、癖、遊びの失業状態を表しています。遊びの失業状態の場合は、保育者とかかわりを豊かにしていく必要があります。

### 3 言葉の発達

言葉の発達と知的な発達はイコールです。1歳半前は自分の行為と気持ちに結び付いて発生した大人の言葉を模倣します。1歳半ごろになると、

「いや」など、自分の思いを不自由ながら伝えるようになります。1歳半過ぎは、「パパ きた」のように2語文で伝えられるようになります。自分の思いを表現できるようになると、自己コントロール形成が進み、手が出るのが減ってきます。しかし、1歳児はまだ言葉で行動を制御することはできません。「なんでそんなことするの!」と怒っても、言葉では理解できず、表情で判断しているだけです。思考をくぐって止めようとしているわけではないので、注意が必要です。

言葉が生まれる土台は共感です。大人が共感すると、伝えたい人ができ、伝えたい事柄がある時、子どもは言葉を使って伝えようとします。ですから、豊かな生活と遊びを用意することが、私たちの仕事となってきます。

#### 4 生活

自分でしようとする気持ちの芽生えを大切にします。大人に共感されることによって、自分でしようとする意欲が育ちます。たっぷり遊び、たっぷり食べ、たっぷりと眠ることを保障します。また、自分から動けるように見通しをしやすい環境を整えて、友達との関係を豊かにします。少しだけ背伸びする(最近接領域: ヴィゴツキー)モデルがいる生活が成長を促します。

- ① 食事・・・
  - ② 排泄・・・
  - ③ 睡眠・・・
- } 第3回参照
- ④ 着脱・・・自分で!の気持ちを助けるような衣類の準備をします。着るよりも、脱ぐことができるようになるのが先です。
  - ⑤ 清潔・・・気持ちの良い状態でいたいという気持ちを育てることが重要です。手を洗ったら「気持ちいいね～」、おしっこで下着が濡れたら、「きもちわるいね～」と行動に合わせて言葉を添えます。

#### 5 保育

保育者との豊かな遊びや交流を大切にしていきます。1人遊びをたっぷりとします。やりたい遊びを見つけ、自己主張することが主体性の発達に繋がります。探索活動など、自分からしようとする時間をたっぷりと保障します。

- ① 素材遊び(感覚・目的外使用)
- ② 散歩(たくさん見立てやふり遊び)
- ③ もて遊び(道具の使用)
- ④ 見立て遊び(模倣)
- ⑤ 絵本(イメージの共有)があります。

#### 6 指導

子どもの行動に共感し、達成感を味わわせ、意欲を育てることです。キーワードは、「主体性」「大人の支え」「選択肢」です。

食事場面などの生活すべてで「やりたい気持ち」を引き出すことや、他の子がやっている姿を見る時間を保障します。そして、自己主張する「いや」の心を大切にします。

大人との安定したかかわりや同じ子に関心を持ちやすいので、その関係を大切に、達成感を仲間と共有できるようにします。さらに、おどかしや甘やかしではなく、ちょっと待つ指導を心掛けます。

いたずらや困った場面では、保育者が子どもの心の代弁者となり、親に子どもの行動の意味を伝えます。厳しい言い方ですが、子どもの行動のすべてが可愛く思える理論と実践の構築が保育者には求められます。いたずらや困ったと思う子どもの行為は、子どもを知るチャンスです。一番大変な思いをしているのは子どもであることを職員集団で確認しつつ、子どもの行動に共感し、子どもの意欲を支える保育を創っていきましょう。

第7回 保育者資質向上研修会  
平成28年11月2日  
会場：焼津公民館 大集会室